

「苦しみにあって良かったこと」

詩篇 119篇71節

聖学院小学校・幼稚園チャプレン／聖学院大学非常勤講師 濱田 辰雄

この聖句の翻訳は、大きく分けて2種類にまとめられます。第1の翻訳は次の2つです。

○ 新共同訳聖書

卑しめられたのはわたしのために良いことでした。わたしはあなたの掟を学ぶようになりました。

○ フランススコ会訳聖書

さげすまれたのは、わたしにとって善いことでした。あなたの掟を学ぶために。

もう1つのグループは次の3つです。

○ 文語訳聖書

困苦(くるしみ)にあひたりしは我によきことなり、
此によりて我なんぢの律法(おきて)をまなびえたり。

○ 口語訳聖書

苦しみにあったことは、わたしに良い事です。
これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました。

○ 新改訳聖書

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。

これを読んでわかるように、最初の言葉を「いやしめられた、さげすまれた」と訳している聖書と、もう1つは「苦しみに会った」と訳している聖書と2種類あるのです。第1のグループでは詩人が直面している困難が人間関係に限定されていますが、第2のグループでは、その困難をもっと広く捉えることができます。病気や事故があり、人間関係でも愛する人の死や又友の裏切り、誤解など、いろんな局面で第2グループの翻訳は、その御言葉の深さを示してくれるように思います。それで説教の題を「苦しみにあって良かったこと」といたしました。

「苦しみにあって良かったこと」なんて本当にあるでしょうか。そのことを知るために今日は舟越保武という人のことをお話したいと思います。この彫刻家はもう亡くなっておられるのですが、私たち聖学院小学校とも少し関わりのある彫刻家です。それは6年生が修学旅行で長崎へ行くことと関わります。その長崎の西坂というところに二十六聖人の彫刻像(レリーフ)があります。1597年に豊臣秀吉によって火あぶりの刑に処せられた26人を記念して作られたレリーフで、それを製作したのが舟越保武なのです。

舟越氏はすばらしい作品を沢山作りました。特にその女性像は美しく、柔らかく、上品な彫刻ばかりです。もちろん「ダミアン神父」や「原の城」のように、決して美しいとは言えない作品もあります。しかしそれらも全体的にはバランスのとれた崇高な作品となっています。

しかし、75才の時に脳梗塞で倒れてしまい、その後遺症で右半身が動かなくなりました。つまりもう右手で彫刻をすることができなくなったのです。家族を含め周りの人はみなもう彫刻家としての舟越保武は終わったと思いました。しかし実は本人だけはあきらめていなかったのです。退院後必死でリハビリを行って、左手で彫刻活動を始めたのです。

そして今までとは全く違った作品を作り出したのです。その中で特に「ゴルゴタ」と題されたキリストの胸像は素晴らしい作品です。その顔はとても荒げずりなのですが、今までになかった宗教性があらわれ出ており、まさしく人々の罪と悲しみ、苦しみをすべて身に負った「神の子」のオーラをただよわせています。

この「ゴルゴタ」を見たとき、やはり彫刻家となっておられる御子息の舟越桂氏が、「父はこの『ゴルゴタ』を作るために脳梗塞で倒れたのだ」とはっきり確信したそうです。

「苦しみにあったことは、わたしにとって良かった」、この御言葉を舟越氏はその一生を通して証しされました。そして二十六聖人が火あぶりの刑にされて天に召されたのと同じ日の2月5日に89才で亡くなりました。

私たちもどんな苦しいことがあってもあきらめないで、その奥にひそむ神さまのおきてを知って主の恵みを証ししていきたいと思います。

2015年9月28日 聖学院小学校 全校礼拝